九州における言語伝播の比較研究

国文学科二一号　高群敦子

序論

本稿では九州内に四本のルートを設定し、九州における言語伝播の比較研究を試みたいと思う。なお、方言を比較するにあたっての方法、及びデータの分析方法においては、稲川順一氏の「四国方言の分類と位置―日本言語地図を利用して―」（『国文研究』第三八号）を参考にした。

対象地点の選定

九州方言全体の流れを見るために、まず、三本のルートを設定してみた。又、各ルートを設定するにあたっては旧街道を参考にした。

①小倉―熊本―鹿児島ルート（薩摩街道）
②小倉―佐賀―長崎ルート　（長崎街道）
③小倉―大分―宮崎ルート　（中津、豊後街道）

その後、③のルートを鹿児島市までのばし、④小倉―大分―宮崎―鹿児島ルートを設定した。

次に各ルートにおいて対象地点を八地点ずつ選んだ。各ルートにおける対象地点は以下の通り。

①小倉―熊本―鹿児島ルート（以下、①ルートと略示）

A北九州市小倉区　E八代郡宮原町
B飯塚市　F阿久根市
C玉名郡菊水町　G串木野市
D熊本市　H鹿児島市

②小倉―佐賀―長崎ルート（以下、②ルート）

A北九州市小倉区　E東彼杵郡東彼杵町
B飯塚市　F大村市
C鳥栖市　G諫早市
D佐賀市　H長崎市

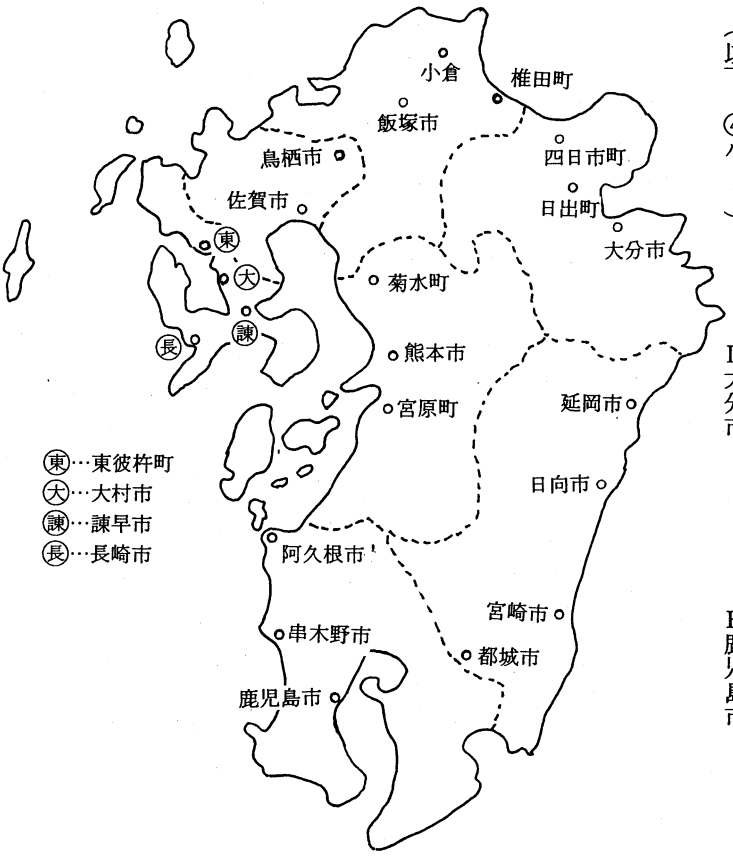
③小倉―大分―宮崎ルート（以下、③ルート）

A北九州市小倉区　E大分市

B 築上郡椎田町　F 延岡市
C 宇佐郡四日市町　G 日向市
D 速見郡日出町　H 宮崎市

④小倉―大分―宮崎―鹿児島ルート（以下、④ルート）

A 北九州市小倉区
B 築上郡椎田町
C 宇佐郡四日市町
D 大分市
E 日向市
F 宮崎市
G 都城市
H 鹿児島市



方法

方言を比較するにあたっての資料として、『九州方言の基礎的研究・改訂版』（九州方言学会　平成三年）から一〇八項目（音韻四一・文法四〇・語彙二七）を用いた。

具体的には、前節で選んだ八対象地点それぞれにおいて、ある言葉に対してどういう言い方をするかを資料から抜き出し、お互いに比較してその相違度を点数化する（点数化の方法は後述）という方法を用いた。これを一〇八項目全てに行い、総計すると、ある対象地点から見たときの、他の対象地点との相対的な言語的距離が点数化される。これを八地点全てに対して行うと、相互の言語的距離が見えてくるのである。

具体的な点数化の方法を次に示す。異なり度合を一〇点満点から〇点までの間で次のように設定する。

音韻

〇点　発音が同じ場合
五点　似たような発音であるが、音価が少し異なる場合
一〇点　音価が全く異なる場合

以上、この三つを基本にしてあとはそれぞれの程度に応じて点数化する。

語彙

〇点　同じ形の場合
二点　語尾のみ異なるもの
四点　同系統と思われるものの最低
　　同系統の語が複数ある場合の最低
六点　同系統と異系統の語が同時にある場合の最低
八点　異系統の語が二つあり、そのうち一つの語尾のみ共通の場合
一〇点　全く異なる語形の場合

以上、この六つを基本にしてあとは相違の程度に応じて点数化する。

文法については、基本として語彙の基準を用いたが活用の違うものは〇点とした。

点数化による結果及び分析

以上のような方法で、各ルート別に、各地点間相互の相違度を点数化し合計する。それをまとめたものが、後に示す表一（①ルート）、表三（②ルート）、表五（③ルート）、表七（④ルート）である。同じ枠内で上方に示している数字は各地点の点数を満点の一〇八〇点で割ったもので、比較する地点との相違度をパーセントで示したものである。また、地図により各地点の直線距離を調べてまとめたものが、後に示す表二（①ルート）、表四（②ルート）、表六

（③ルート）、表八（④ルート）である。

本稿では単（重）回帰分析の手法を取り入れて分析を行った。今回は変数に距離のみをとり計算を行った。各ルート別に、相違度、距離のデータ（各二八件）をもとに計算を行うと、次のような式が得られる。

①ルート

Y＝三二・四〇九一〇＋〇・一三三五四X

（相関係数〇・七四二九二七）

Yは予測値（単回帰分析から得られるある地点の予想される相違度）

Xは距離（基準地点とある地点との直線距離）

②ルート

Y＝二八・七〇五九〇＋〇・一三三五五X

（相関係数〇・七一八九八一）

③ルート

Y＝二八・七八九三〇＋〇・一一一〇三X

（相関係数〇・七七一一五一）

④ルート

Y＝三五・六〇三二〇＋〇・〇九六七一X

（相関係数〇・六九一〇五）

相関係数を信頼の置ける値に引き上げるため、誤差（実際の相違度から上の式で得られた予測値Yを引いたもの）の大きい箇所を除いて計算し直す。

①ルート

誤差±一三％以上のものをカット

Y＝三一・〇六四二〇＋〇・一三四九九X

（相関係数〇・八二〇三三一）

②ルート

誤差±一〇％以上のものをカット

Y＝二七・一三三一〇＋〇・一三六七六X

（相関係数〇・八三九〇八）

③ルート

誤差±八％以上のものをカット

Y＝二九・六三二二〇＋〇・〇九八七五X

（相関係数〇・八三七三二五）

④ルート

誤差±一三％以上のものをカット

Y＝三二・八〇〇三〇＋〇・一〇五一七X

（相関係数〇・八四四五六七）

すると、相関係数がかなり高くなり、十分信頼するに足ると思われる。よって、それぞれ後者の式を採用することにする。データをカットした部分はそれぞれ後者の式によって計算を行い、新たに予測値・誤差を算出する。

次に、各ルート別にグラフの横軸に距離、縦軸に相違度

をとって、それぞれのデータを書き込み、さらに上で得られた後者の式を同じグラフに書き込むと、後に示す図A～図Hが得られる。この作業を、①～④のルート、それぞれについて行った。

各ルートの図A～図Hを見ると、式で表される直線より上に位置している対象地点と下に位置している対象地点とがあることが分かる。上に位置すればするほど距離の割には言語の相違度が大きく、下に位置すればするほど距離の割に言語の相違度が小さいことを表している。また、直線に近いほど、言語が距離と見合った相違度を持っている事を示す。

小倉－熊本－鹿児島

A　北九州市小倉区
B　飯塚
C　玉名郡菊水町
D　熊本市
E　八代郡宮原町
F　阿久根市
G　串木野市
H　鹿児島市

表1　二地点間の相違度の点数化及びその百分率

	A	B	C	D	E	F	G	H
A		36.5 391	41.2 441	39.5 423	42.1 451	54.1 579	59.3 635	61.5 658
B	36.5 391		41.0 439	40.4 433	43.2 463	59.0 632	62.5 669	64.4 690
C	41.2 441	41.0 439		23.9 256	25.3 271	51.0 546	56.3 603	61.5 658
D	39.5 423	40.4 433	23.9 256		26.5 284	53.7 575	61.4 657	63.2 676
E	42.1 451	43.2 463	25.3 271	26.5 284		55.1 590	60.2 644	63.2 676
F	54.1 579	59.0 632	51.0 546	53.7 575	551. 590		42.5 455	44.6 477
G	59.3 635	62.5 669	56.3 603	61.4 657	60.2 644	42.5 455		31.6 338
H	61.5 658	64.4 690	61.5 658	63.2 676	63.2 676	44.6 477	31.6 338	

上：百分率
下：点数

小倉－熊本－鹿児島

表2　二地点間の距離

	A	B	C	D	E	F	G	H
A		26	97	125	146	210	249	266
B	26		74	105	125	187	225	246
C	97	74		33	54	113	151	171
D	125	105	33		23	90	125	143
E	146	125	54	23		71	105	117
F	210	187	113	90	71		41	71
G	249	225	151	125	105	41		35
H	266	246	171	143	117	71	35	

（単位　km）

小倉－佐賀－長崎

A　北九州市小倉区
B　飯塚
C　鳥栖市
D　佐賀市
E　東彼杵郡東彼杵町
F　大村市
G　諫早市
H　長崎市

表3　二地点間の相違度の点数化及びその百分率

	A	B	C	D	E	F	G	H
A		36.5 391	48.8 522	50.7 543	45.3 485	44.1 472	46.8 501	49.2 527
B	36.5 391		41.6 445	47.0 503	43.3 464	41.8 448	46.4 497	41.8 448
C	48.8 522	41.6 445		38.2 409	32.1 344	39.9 427	36.0 386	41.8 448
D	50.7 543	47.0 503	38.2 409		32.2 345	31.5 337	27.8 298	32.5 348
E	45.3 485	43.3 464	32.1 344	32.2 345		26.3 282	30.0 321	31.7 339
F	44.1 472	41.8 448	39.9 427	31.5 337	26.3 282		23.6 253	31.3 335
G	46.8 501	46.4 497	36.0 386	27.8 298	30.0 321	23.6 253		28.0 300
H	49.2 527	41.8 448	41.8 448	32.5 348	31.7 339	31.3 335	28.0 300	

上：百分率
下：点数

小倉－大分－宮崎

A　北九州市小倉区
B　築上郡椎田町
C　宇佐郡四日市町
D　速見郡日出町
E　大分市
F　延岡市
G　日向市
H　宮崎市

表5　二地点間の相違度の点数化及びその百分率

	A	B	C	D	E	F	G	H
A		35.5 380	45.1 483	41.3 442	45.9 491	45.6 488	48.3 517	51.3 549
B	35.5 380		32.4 347	29.9 320	33.4 358	42.6 456	54.5 583	46.2 495
C	45.1 483	32.4 347		23.6 252	25.7 275	39.1 419	49.6 531	46.8 501
D	41.3 442	29.9 320	23.6 252		16.6 178	39.7 425	49.1 526	46.4 497
E	45.9 491	33.4 358	25.7 275	16.6 178		39.1 419	49.3 528	43.9 470
F	45.6 488	42.6 456	39.1 419	39.7 425	39.1 419		37.4 400	38.0 407
G	48.3 517	54.5 583	49.6 531	49.1 526	49.3 528	37.4 400		38.0 407
H	51.3 549	46.2 495	46.8 501	46.4 497	43.9 470	38.0 407	38.0 407	

上：百分率
下：点数

小倉－佐賀－長崎

表4　二地点間の距離

	A	B	C	D	E	F	G	H
A		26	56	85	126	136	136	156
B	26		31	59	100	108	108	128
C	56	31		28	69	77	77	100
D	85	59	28		44	51	51	72
E	126	100	69	44		21	28	38
F	136	108	77	51	21		10	21
G	136	108	77	51	28	10		23
H	156	128	100	72	38	21	23	

（単位　km）

小倉－大分－宮崎－鹿児島

A　北九州市小倉区
B　築上郡椎田町
C　宇佐郡四日市町
D　大分市
E　日向市
F　宮崎市
G　都城市
H　鹿児島市

表7　二地点間の相違度の点数化及びその百分率

	A	B	C	D	E	F	G	H
A		35.5 380	45.1 483	45.9 491	48.3 517	51.3 549	62.1 671	61.5 658
B	35.5 380		32.4 347	33.4 358	54.5 583	46.2 495	55.0 595	64.5 697
C	45.1 483	32.4 347		25.7 275	49.6 531	46.8 501	55.4 599	62.8 679
D	45.9 491	33.4 358	25.7 275		49.3 528	43.9 470	52.2 564	63.7 688
E	48.3 517	54.5 583	49.6 531	49.3 528		38.0 407	52.6 568	68.9 745
F	51.3 549	46.2 495	46.8 501	43.9 470	38.0 407		52.9 572	61.8 668
G	62.1 671	55.0 595	55.4 599	52.2 564	52.6 568	52.9 572		34.0 368
H	62.1 658	64.5 697	62.8 679	63.7 688	68.9 745	61.8 668	34.0 368	

上：百分率
下：点数

小倉－大分－宮崎

表6　二地点間の距離

	A	B	C	D	E	F	G	H
A		28	59	77	102	156	190	236
B	28		30	48	74	128	154	215
C	59	30		21	44	103	144	197
D	77	48	21		26	82	123	177
E	102	74	44	26		62	108	162
F	156	128	103	82	62		49	105
G	190	154	144	123	108	49		56
H	236	215	197	177	162	105	56	

（単位　km）

小倉ー大分ー宮崎ー鹿児島

表8　二地点間の距離

	A	B	C	D	E	F	G	H
A		28	59	102	190	236	246	266
B	28		30	74	154	215	230	253
C	59	30		44	144	197	215	248
D	102	74	44		108	162	187	225
E	190	154	144	108		56	89	141
F	236	215	197	162	56		41	100
G	246	230	215	187	89	41		59
H	266	253	248	225	141	100	59	

（単位　km）

本論

（一）小倉―熊本―鹿児島ルート

A　北九州市小倉区から見た場合

全体的に見てほとんどの対象地点が直線より下に位置している。これは、言語的に非常に開放的な都市であると言うことができよう。直線より上に位置するのは同県内の飯塚市（誤差一・九＝直線から一・九％上方に位置すると言うことを表す。以下同様）だけであり、距離の割には言語的な異なりが大きいことを示す。

飯塚市は、今回は取り上げなかったが、福岡市との交流が深く、言葉もそちらの方からの影響を強く受けていると思われるので、このような結果がでたのだろうと思う。

その他の対象地点は、菊水町（誤差―二・九）、熊本市（誤差―八・四）、宮原町（誤差―八・六）、阿久根市（誤差―五・三）、串木野市（誤差―五・三）鹿児島市（誤差―五・四）と、いずれも直線より下に位置している。

B　飯塚市から見た場合

全体的に見た場合、対象地点が直線より上か下か、どちらか一方に偏っているとは感じられない。

直線より上に位置しているのは、小倉（誤差一・九）、阿久根市（誤差二・七）、串木野市（誤差一・〇）の三地点で、同県内の小倉の相違度が距離の割に高い事は、先に述べたように、飯塚市と福岡市の関係から説明がつくであろう。その他の鹿児島県の二地点、阿久根市と串木野市が直線より上に位置していることは、予想していた通りの結果とも言える。

直線より下に位置しているのは、熊本県の熊本市（誤差―四・八）、宮原町（誤差―四・七）の二地点。

熊本県の菊水町（誤差―〇・〇五）、鹿児島県の鹿児島市（誤差〇・一）は距離に見合った位置にあると言えるだろう。

C　玉名郡菊水町から見た場合

直線より上に位置しているのは鹿児島県の阿久根市（誤差四・六）、串木野市（誤差四・八）、鹿児島市（誤差七・三）の三地点

直線より下に位置しているのは、同県内の熊本市（誤差―一一・六）、宮原町（誤差―一三・〇）、福岡県の小倉（誤差―二・九）の三地点。福岡県の飯塚市（誤差―〇・〇五）は、ほぼ直線上に位置している。

同県内の二地点が言語的に近しいのはもちろんのことであろう。また、小倉とは飯塚市を見た場合、小倉の方が距離（横軸）の上では遠くに位置しているのに、相違度（縦軸）では飯塚市とほとんど変わらない所に位置している。これは小倉との結び付きがより強いことを表していると考えられる。

D　熊本市から見た場合

直線より上に位置しているのは三地点、阿久根市（誤差一〇・五）、串木野市（誤差一三・四）、鹿児島市（誤差一二・八）。直線より下に位置しているのは四地点、菊水町（誤差―一一・六）、宮原町（誤差―七・六）小倉（誤差―八・四）、飯塚市（誤差―四・八）。

数だけ見るとどちらか一方に偏っているとは感じられず、特に開放的とも閉鎖的とも言えないだろう。

しかし、同県内の二地点（菊水町、宮原町）を除いて考えてみると、熊本県の南側、鹿児島県の三地点（阿久根市、串木野市、鹿児島市）はどれも直線より上に位置し、逆に、熊本県の北側、福岡県の二地点（小倉、飯塚）は直線より下に位置している。また、同県内の二地点について考えてみても、熊本市より北にある菊水町の方が、熊本市より南にある宮原町よりも距離は遠いのに相違度は低くなっている。

これらのことから、「熊本市は言語面において、北に向かっては開放的であり、南に向かっては閉鎖的である。」と言うことができるのではないか。このことはまた福岡県との交流の深さを示していると思われる。

E　八代郡宮原町からみた場合

直線より上に位置しているのは鹿児島県の阿久根市（誤差一四・四）、串木野市（誤差一四・九）、鹿児島市（誤差一六・三）の三地点。

直線より下に位置しているのは同県内の菊水町（誤差―一三・〇）、熊本市（誤差―七・六）と、福岡県の小倉（誤差―八・六）、飯塚市（誤差―四・七）の四地点。

熊本市から見た場合と同じく、数だけを見ると、特に偏りは感じられない。しかし、細かく見てみると、直線より上に位置しているのは全て宮原町より南側にある対象地点であり、一方、直線より下に位置しているのは全て宮原町より北側にある対象地点である。

このことから、宮原町も熊本市と同じく、北に向かっては開放的であり、南に向かっては閉鎖的であると言えよう。

F　阿久根市から見た場合

全体的に見て、ほとんどの対象地点が直線より上に位置している。つまり、言語的に非常に孤立していると言う事ができよう。

鹿児島県の言語的性格から、こういう結果になることはある程度予想していたことではあったのだが、それにしても、同県内の串木野市（誤差五・九）、鹿児島市（誤差三・九）がともに直線より上に位置していることは驚きである。

直線より下に位置しているのは福岡県の小倉（誤差―五・三）のみ。その他の対象地点の、飯塚（誤差二・七）、菊水町（誤差四・六）、熊本市（誤差一〇・五）、宮原町（誤差一四・四）、串木野市、鹿児島市は直線より上に位置している。

特に、熊本県の二地点、熊本市と宮原町の誤差が大きく、言語面での交流があまり無かったと考えられる。

G　串木野市から見た場合

全体的に見た場合、直線より上に位置する対象地点が圧倒的に多く、言語的に非常に閉鎖的であると言えよう。

直線より下に位置しているのは同県内の鹿児島市（誤差―四・二）と福岡県の小倉（誤差―五・三）の二地点。

直線より上に位置しているのは同県内の阿久根市（誤差五・九）、福岡県の飯塚市（誤差一・〇）、熊本県の菊水町（誤差四・八）、熊本市（誤差一三・四）、宮原町（誤差一四・九）の五地点。

福岡県の二地点に比べ、熊本県の熊本市、宮原町は距離的にはかなり近いのであるが、相違度を見てみるとあまり変わらない。ここでも熊本県との言語面での交流の少なさを見ることができる。

H　鹿児島市から見た場合

全体的に見て対象地点はほとんど直線より上に位置しており、かなり孤立した言語であると言えるだろう。

阿久根市、串木野市から見た場合と同じく、ここでも福岡県の小倉（誤差―五・四）は直線より下に位置している。鹿児島県から一番遠い距離にあることを考えると、これは不思議な感じがする。その他、同県内の串木野市（誤差―

四・二）が直線より下に位置している。

直線より上に位置しているのは同県内の阿久根市（誤差三・九）、福岡県の飯塚市（誤差〇・一）、熊本県の菊水町（誤差七・三）、熊本市（誤差一二・三）、宮原町（誤差一六・三）の五地点。

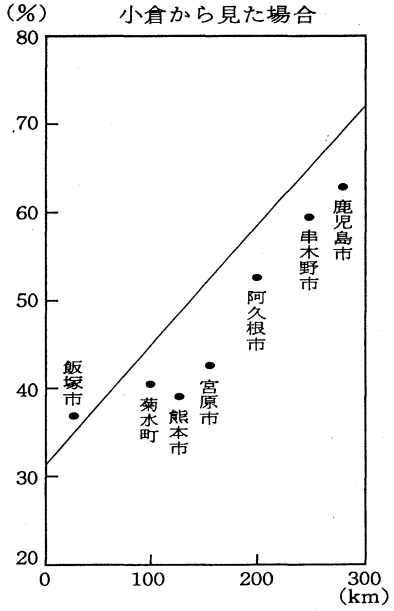
以上、小倉―熊本―鹿児島ルートの全対象地点（八地点）についてそれぞれに述べてきたが、全体を通してみてみると次のようなことが言えると思う。

まず、このルートに関しては福岡県の小倉が非常に大きな影響力を持っていると言えるだろう。対象地点八地点のうち、開放的な言語と言えるのは小倉だけであり、熊本県と鹿児島県の対象地点（六地点）全てに対して直線より下に位置していた。

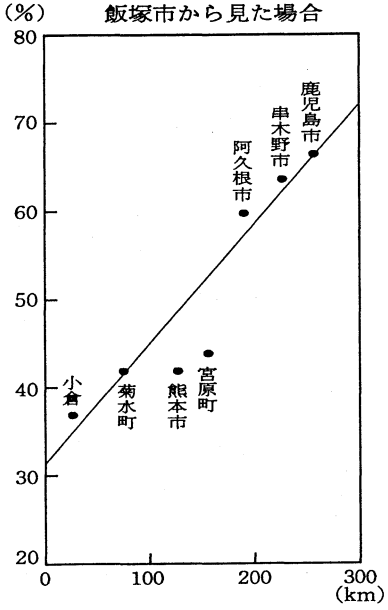
熊本県については、地理的には福岡県と鹿児島県の間に位置し、つまり、両県に接していながらも、言語面では福岡県から受ける影響が非常に大きく、鹿児島県との交流はあまり感じられなかった。

鹿児島県側から見てもこれは言えることで、地理的には隣り合う形の熊本県と、鹿児島県とは全く接することのない福岡県とでの相違度にはあまり差がなかった。また、小倉を除く他県の対象地点は全て直線より上に位置しており、非常に孤立した言語を持っていると言えよう。

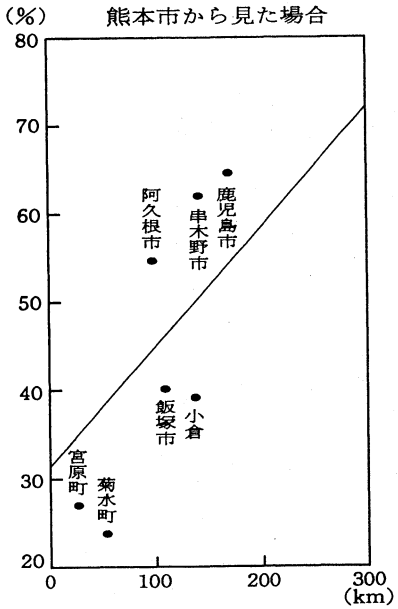
図A



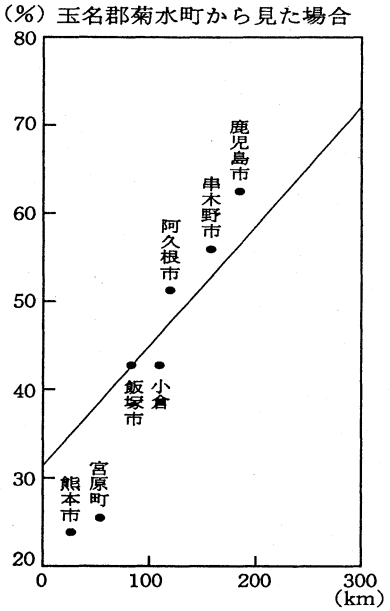
図B



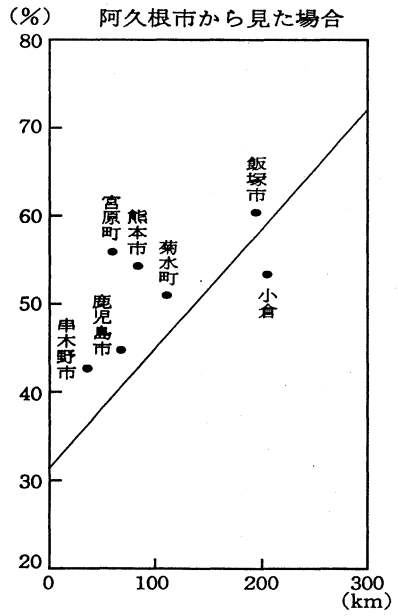
図D


(%)
熊本市から見た場合
80
70
60
50
40
30
20
0
100
200
300
(km)
鹿児島市
串木野市
阿久根市
飯塚市
小倉
宮原町
菊水町

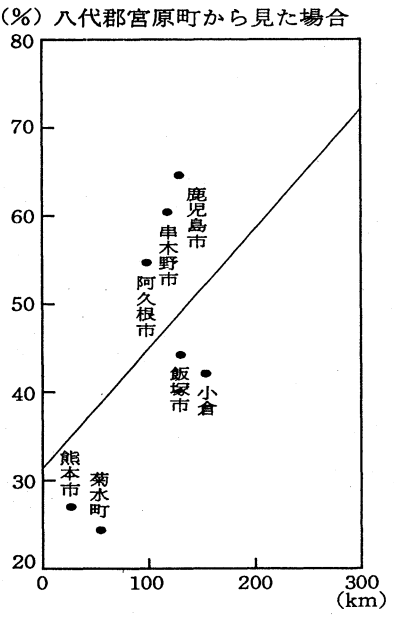
図C


(%)
玉名郡菊水町から見た場合
80
70
60
50
40
30
20
0
100
200
300
(km)
鹿児島市
串木野市
阿久根市
飯塚市
小倉
宮原町
熊本市

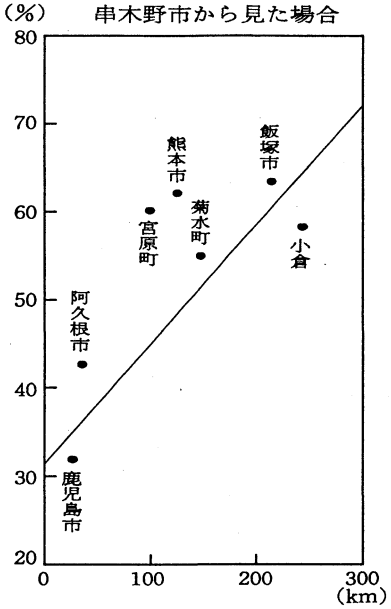
図F


(%)
阿久根市から見た場合
80
70
60
50
40
30
20
0
100
200
300
(km)
飯塚市
宮原町
熊本市
菊水町
小倉
鹿児島市
串木野市

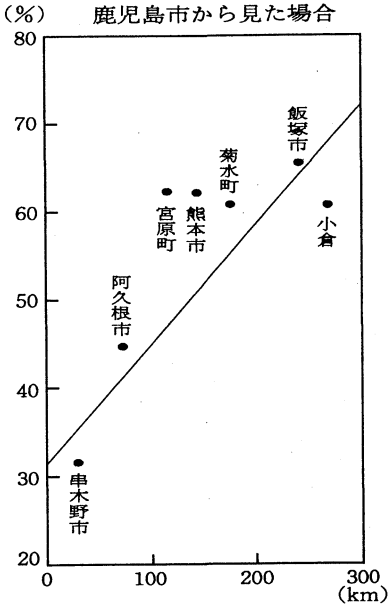
図E


(%)
八代郡宮原町から見た場合
80
70
60
50
40
30
20
0
100
200
300
(km)
鹿児島市
串木野市
阿久根市
飯塚市
小倉
熊本市
菊水町

図G



図H



(二) 小倉—佐賀—長崎ルート

A 北九州市小倉区から見た場合

全体的に見てほとんどの対象地点が直線より上に位置している。つまり、言語的に非常に孤立した都市であると言うことができよう。直線より下に位置しているのは1地点、長崎県の大村市（誤差—一・六）のみ。

その他の対象地点は、同県内の飯塚市（誤差五・八）、佐賀県の鳥栖市（誤差一四・〇）、佐賀市（誤差一一・九）、長崎県の東彼杵郡（誤差〇・九）、諫早市（誤差一・〇）長崎市（誤差〇・七）と、いずれも直線より上に位置している。その中でも、距離的にはそう遠くないところに位置する佐賀県の二地点の誤差が極めて大きく、言語面での交流の少なさというものをうかがわせる。

B 飯塚市から見た場合

小倉から見た場合と同様、ほとんどの対象地点は直線より上に位置しており、かなり孤立した言語を持っていると言えよう。

直線より上に位置しているのは同県内の小倉（誤差五・八）、佐賀県の鳥栖市（誤差一〇・二）、佐賀市（誤差一一・

八)、長崎県の東彼杵町（誤差二・五)、諫早市（誤差四・五)の五地点。下に位置しているのは長崎県の大村市（誤差—〇・五)、長崎市（誤差—二・八）の二地点。

ここでも佐賀県の二地点の誤差が非常に大きいことが目につく。また、距離的には一番遠くに位置する長崎市が直線より下に位置しており、しかも大村市の誤差よりもマイナスの度合が大きい。相違度を見ても小倉（相違度三六・五)、鳥栖市（相違度四一・六）についで三番目の低さ（相違度四一・八）である。このことは注目すべき結果であろう。

C　鳥栖市から見た場合

全体的に見た場合、直線より上に位置している対象地点が多く、孤立の傾向が強いと言える。

直線より下に位置しているのは長崎県の東彼杵町（誤差—四・四）と諫早市（誤差—一・六）の二地点。

直線より上に位置しているのは同県内の佐賀市（誤差七・二)、福岡県の小倉（誤差一四・〇)、飯塚市（誤差一〇・二)、長崎県の大村市（誤差二・二)、長崎市（誤差〇・九）の五地点。

特に福岡県の二地点は誤差、相違度の値（小倉の相違度四八・八、飯塚市の相違度四一・六）共に大きい。鳥栖市の地理的位置から考えると（三方を福岡県と接する。東は福岡県小郡市、北西は那珂川町、南は久留米市）言語的には筑後からの影響をかなり受けていると思われる。よって、このような結果がでたのだろう。同県内の佐賀市が直線より上に位置しているのも、このことから説明がつくであろう。

D　佐賀市から見た場合

全体的に見て、対象地点が直線より上か下か、どちらか一方に偏っているとは感じられない。

直線より上に位置しているのは同県内の鳥栖市（誤差七・二)、福岡県の小倉（誤差一一・九)、飯塚市（誤差一一・八）の三地点。鳥栖市から見た場合と同様、特に福岡県の二地点は誤差と相違度の値（小倉の相違度五〇・七飯塚市の相違度四七・〇）共に大きく、言語面での交流はあまり無かったと考えられる。

直線より下に位置しているのは東彼杵町（誤差—〇・九)、大村市（誤差—二・六)、諫早市（誤差—六・三)、長崎市（誤差—四・四）の四地点。これらは全て長崎県の対象地点であり、言語面での交流がかなり積極的であることを物語っている。また、一番相違度の低い諫早市については、明治五年一月に長崎県に編入するまでは佐賀県の一部であったことを考えると、うなずける結果であろう。

E　東彼杵町から見た場合

全体的に見た場合、直線より上に位置しているのが二地点、下に位置しているのが五地点で、言語的に開放的であると言えよう。

直線より上に位置しているのは福岡県の二地点、小倉（誤差〇・九）と飯塚市（誤差二・五）。東彼杵町との距離、地理的な位置から見て妥当な結果と言えるか。

直線より下に位置しているのは同県内の大村市（誤差―三・七）、諫早市（誤差―〇・九）、長崎市（誤差―〇・六）、佐賀県の鳥栖市（誤差―四・四）、佐賀市（誤差―〇・九）の五地点。

F　大村市から見た場合

全体的に見て、ほとんどの対象地点が直線より下に位置しており、かなり開放的な言語であると言える。

直線より上に位置しているのは、同県内の長崎市（誤差一・三）、佐賀県の鳥栖市（誤差二・二）の二地点。

直線より下に位置しているのは、同県内の諫早市（誤差―四・九）、東彼杵町（誤差―三・七）、佐賀県の佐賀市（誤差―二・六）、福岡県の飯塚市（誤差―〇・一）、小倉（誤差―一・六）の五地点である。

同県内の対象地点について見てみると、長崎市だけが直線よりも上に位置しており、距離の割には言語的な異なりが大きいことを示している。また、佐賀県の対象地点については、二地点がそれぞれ直線の上と下にはっきり分かれており、筑後からの影響が大きいと思われる鳥栖市に対して、佐賀市は長崎との結び付きが非常に強いという結果を見ることができよう。

G　諫早市から見た場合

直線より上に位置しているのが二地点、下に位置しているのが五地点で、言語的には開放的と言えよう。

福岡県の対象地点は二地点とも直線より上に位置しており、飯塚市（誤差四・五）、小倉（誤差一・〇）、諫早市との距離、地理的位置から見ても交流は少なかったと思われる。

その他の対象地点は、いずれも直線より下に位置しており、同県内の大村市（誤差―四・九）、長崎市（誤差―二・二）、東彼杵町（誤差―〇・九）、佐賀県の佐賀市（誤差―六・三）、鳥栖市（誤差―一・六）、特に佐賀市の誤差のマイナスの度合いが大きい。これは、先に述べたように、諫早市が佐賀県の一部であったことが影響していると考えられる。

H　長崎市から見た場合

直線より上に位置しているのは三地点、下に位置してい

るのは四地点で、数だけ見ると特にどちらか一方に偏っているとは感じられない。しかし、直線より上に位置している三地点はどれも誤差が小さく、どちらかと言えば、やや開放的な言語をもつと言えよう。

直線より上に位置しているのは、同県内の大村市（誤差一・三）、佐賀県の鳥栖市（誤差〇・九）、福岡県の小倉（誤差〇・七）の三地点。同県内の大村市の誤差が一番大きいという結果は意外であった。

直線より下に位置しているのは、同県内の諫早市（誤差―二・二）、東彼杵町（誤差―〇・六）、佐賀県の佐賀市（誤差―四・四）、福岡県の飯塚市（誤差―二・八）の四地点。誤差のマイナスの度合が一番大きいのは佐賀市で、ここでも言語面での交流の深さを見ることができる。

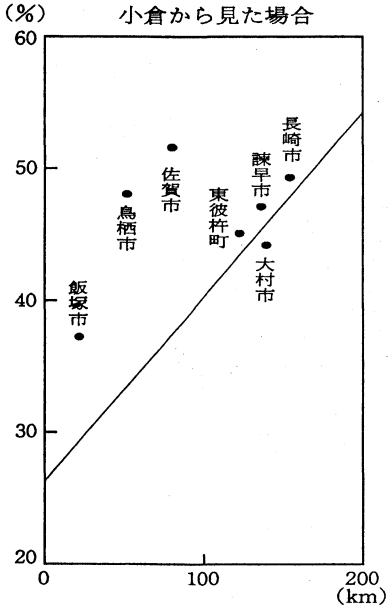
以上、小倉―佐賀―長崎ルートの全対象地点（八地点）についてそれぞれに述べてきた。これから、全体を通してみて気付いたことを述べてみたいと思う。

まず、このルートに関しては小倉の言語的影響力はさほど感じられない。むしろ、このルートにおいては同じ福岡県の飯塚市と共に孤立の傾向を示している。地理的には隣り合う形の佐賀県とも言語的にはかなりの距離があると言えよう。

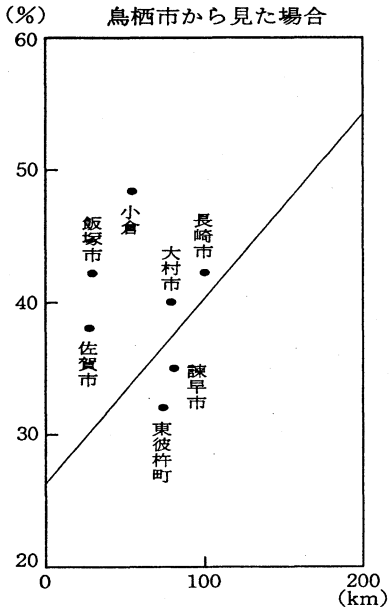
佐賀県の鳥栖市に関しては、その地理的位置から、ルート以外の筑後方面から受ける影響が大きいと思われ、このルートにおいては孤立の傾向を示す結果となった。佐賀市については、長崎県との言語的交流が非常に盛んであると言えるだろう。福岡県との言語的交流はあまり感じられない。

対象地点八地点のうち、開放的な言語をもつと言えるのは全て長崎県の対象地点であった。このルートにおいて、長崎県はかなりの影響力を持っていると思われる。長崎県内において、大村市と長崎市では言語的な対立が見られた。

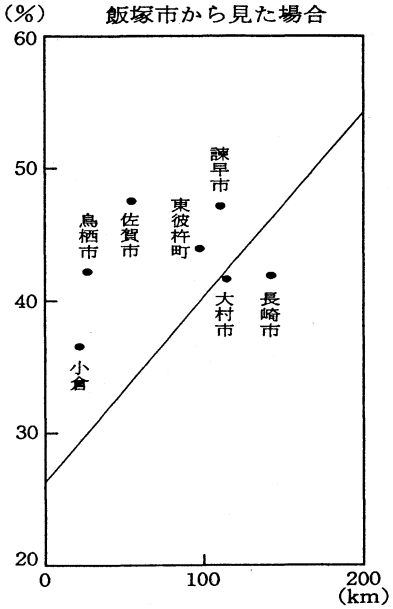
図A



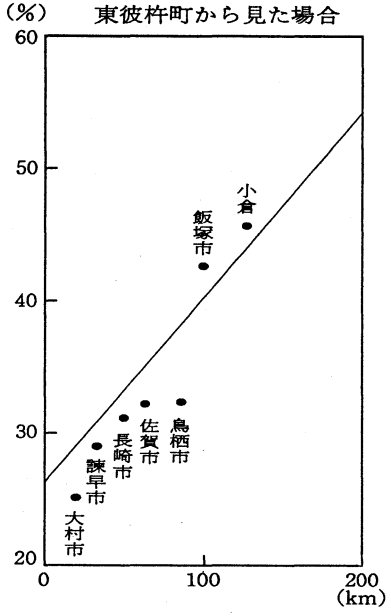
図C


(%)
鳥栖市から見た場合
60
50
40
30
20
0
100
200
(km)
小倉
飯塚市
長崎市
大村市
佐賀市
諫早市
東彼杵町

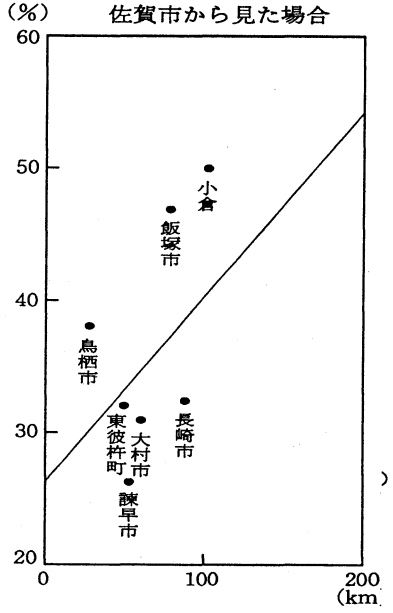
図B


(%)
飯塚市から見た場合
60
50
40
30
20
0
100
200
(km)
諫早市
佐賀市
東彼杵町
鳥栖市
大村市
長崎市
小倉

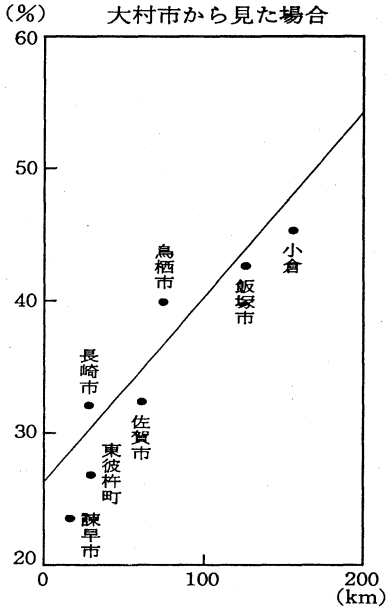
図E


(%)
東彼杵町から見た場合
60
50
40
30
20
0
100
200
(km)
小倉
飯塚市
佐賀市
鳥栖市
長崎市
諫早市
大村市

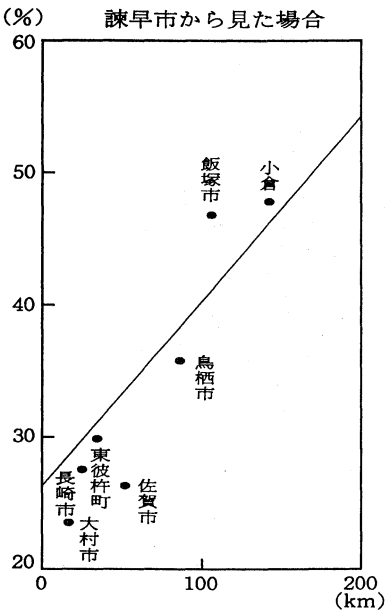
図D


(%)
佐賀市から見た場合
60
50
40
30
20
0
100
200
(km)
小倉
飯塚市
鳥栖市
東彼杵町
大村市
長崎市
諫早市

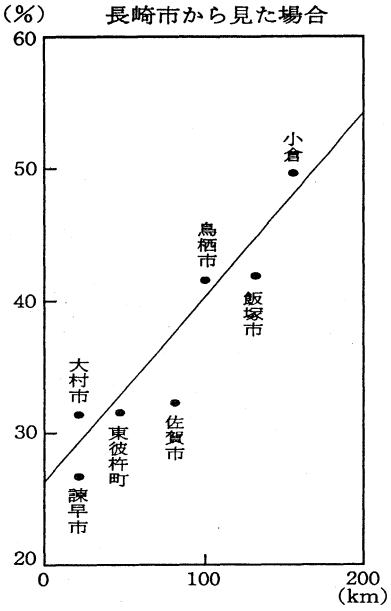
図F



図G



図H



(三) 小倉—大分—宮崎ルート

A 北九州市小倉区から見た場合

全体的に見て、直線より上に位置している対象地点の方が多く、言語的には閉鎖的と言えよう。

直線より上に位置しているのは同県内の椎田町（誤差三・一）、大分県の四日市町（誤差九・六）、日出町（誤差四・〇）、大分市（誤差六・二）、宮崎県の延岡市（誤差〇・五）の五地点。下に位置しているのは宮崎市（誤差—一・六）のみで、宮崎県の日向市（誤差—〇・〇一）はほぼ直線上に位

置している。

大分県の対象地点について見てみると、四日市町（相違度四五・一）と大分市（相違度四五・九）の相違度にはあまり差がなく、日出町（相違度四一・三）の相違度が三地点の中で最も低くなっている。小倉からの距離を考えると、これは面白い結果だろう。

宮崎県の対象地点の相違度は小倉からの距離の順に並んでいる。延岡市（相違度四五・六）の相違度の値を見ると、小倉からの距離が半分しかない四日市町とほとんど変わらないというのは驚きである。

B　築上郡椎田町から見た場合

直線より上に位置しているのは三地点、同県内の小倉（誤差三・一）、宮崎県の延岡市（誤差〇・三）、日向市（誤差九・六）。

直線より下に位置しているのは四地点、大分県の四日市町（誤差―〇・二）、日出町（誤差―四・四）、大分市（誤差―三・五）、宮崎県の宮崎市（誤差―四・六）。

大分県の対象地点は、三地点とも直線より下に位置しており、言語的に近しい関係にあることを示している。また、椎田町からほぼ同距離にある小倉と四日市町とを見ると、同県内の小倉の方が相違度が高く、大分県の四日市町の方が下に位置している。どちらかと言えば、大分県の方に向かって開放的と言えるのだろうか。

宮崎県の対象地点を見ると、その相違度は距離の順には並んでおらず、距離的に一番遠い宮崎市だけが直線より下に位置している。

C　宇佐郡四日市町から見た場合

全体的に見て、直線より下に位置している対象地点の方が多く、言語的には開放的と言えよう。

直線より上に位置しているのは福岡県の小倉（誤差九・六）と宮崎県の日向市（誤差五・七）の二地点で、他の対象地点に比べ、二地点ともかなり直線から離れた所に位置しているのが目につく。特に小倉の誤差の値が大きい。

直線より下に位置しているのは同県内の日出町（誤差―八・一）、大分市（誤差―八・二）、福岡県の椎田町（誤差―〇・二）、宮崎県の延岡市（誤差―〇・七）、宮崎市（誤差―二・三）の五地点。同県内の二地点の誤差はさすがにマイナスの度合いが大きく、言語的に近しいと言える。その他の三地点はあまり直線から離れていない。

D　速見郡日出町から見た場合

直線より上に位置しているのが三地点、下に位置してい

るのが四地点で、特にどちらか一方に偏っているとは言えないだろう。

直線より上に位置しているのは福岡県の小倉（誤差四・〇）、宮崎県の延岡市（誤差一・九）、日向市（誤差七・三）の三地点。特に日向市は誤差、相違度の値（相違度四九・1）、共に大きい。

直線より下に位置しているのは同県内の四日市町（誤差―八・一）、大分市（誤差―一五・六）、福岡県の椎田町（誤差―四・四）、宮崎県の宮崎市（誤差―〇・七）の四地点。ここでも宮崎市は直線より下に位置しており、言語的に近しい関係にあることを示している。宮崎市が一番遠くに位置していること、また、その他の宮崎県の対象地点が二地点とも直線より上に位置していることを考えると、これは不思議な感じもする。

E　大分市から見た場合

全体的に見て、対象地点が直線より上か下か、どちらか一方に偏っているとは感じられない。直線より上に位置しているのは三地点、下に位置しているのは四地点である。

同県内の対象地点は二地点とも直線より下に位置しており、相違度も距離の順にならんでいる。日出町（誤差―一五・六、相違度一六・六）、四日市町（誤差―八・二、相違度二五・七）。その他、福岡県の椎田町（誤差―三・五）、宮崎県の宮崎市（誤差―一・七）が直線より下に位置している。

直線より上に位置しているのは福岡県の小倉（誤差六・二）、宮崎県の延岡市（誤差三・三）、日向市（誤差九・〇）の三地点。これは日出町から見た場合と似たような結果だった。

F　延岡市から見た場合

全体的に見ると、対象地点のほとんどが直線よりやや上に位置しており、どちらかと言えば孤立した言語と言えようか。

直線より上に位置しているのは同県内の日向市（誤差二・九）、福岡県の小倉（誤差〇・五）、椎田町（誤差〇・三）、大分県の日出町（誤差一・九）、大分市（誤差三・三）の五地点。下に位置しているのは同県内の宮崎市（誤差―二・〇）と大分県の四日市町（誤差―〇・七）の二地点である。

同県内の対象地点を見てみると、日向市との距離は宮崎市との距離の半分しかないのに、相違度にはほとんど差がない。（日向市の相違度三七・四、宮崎市の相違度三八・〇）。大分県の対象地点についても、同じような結果が見られる。

G　日向市から見た場合

直線より上に位置しているのが六地点、ほぼ直線上に位置しているのが一地点で、言語的には非常に孤立していると言えよう。

直線より上に位置しているのは同県内の延岡市（誤差二・九）、宮崎市（誤差二・八）、福岡県の椎田町（誤差九・六）、大分県の四日市町（誤差五・七）、日出町（誤差七・三）、大分市（誤差九・〇）の六地点。福岡県の小倉（誤差―〇・〇一）はほぼ直線上に位置している。

日向市には、宮崎県における海上交通の要衝となるような港（美々津、細島）が古くからあり、近世には既に関西や中国地方と活発な交流が行われていた。このことも少なからず影響しているのではないか。

H　宮崎市から見た場合

全体的に見て、ほとんどの対象地点が直線より下に位置している。ただし、どれもあまり直線から離れておらず、やや開放的な言語と言うことができようか。

直線より上に位置しているのは同県内の日向市（誤差二・八）のみ。

その他の対象地点は、同県内の延岡市（誤差―二・〇）、大分県の大分市（誤差―一・七）、日出町（誤差―〇・七）、四日市町（誤差―二・三）、福岡県の椎田町（誤差―四・六）、小倉（誤差―一・六）と、いずれも直線より下に位置している。

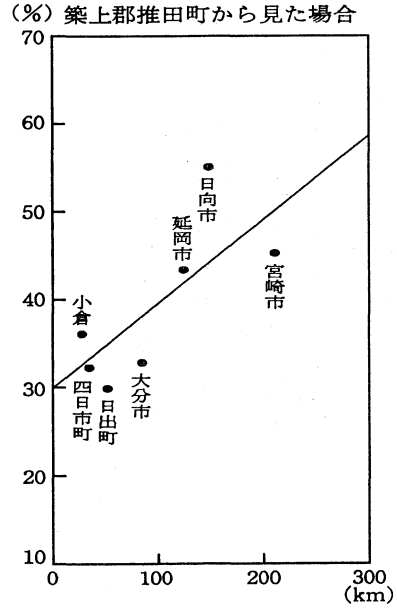
以上、小倉―大分―宮崎ルートの全対象地点（八地点）についてそれぞれに述べてきた。以下、ルート全体を通してみて気付いたことを述べてみたいと思う。

福岡県の対象地点については、小倉と椎田町とでは異なる傾向が見られた。小倉はこのルートにおいて孤立の傾向を示しており、特に近しいと言える対象地点は見当たらない。一方では、椎田町の方は、言語的には大分県と近しい関係にあると言えるようだ。

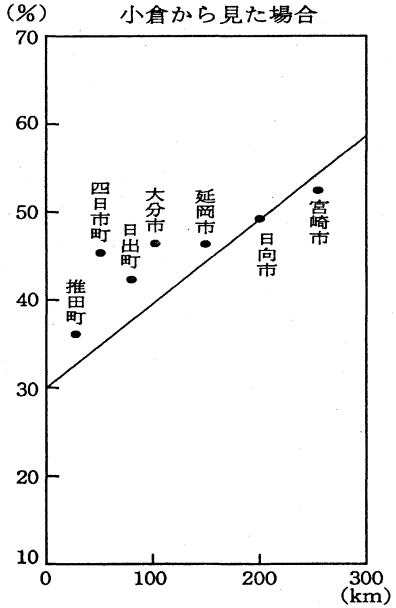
大分県の三地点については、いずれも宮崎市との言語的交流が感じられた。距離的には小倉の方が近いのだが、先に述べたように、小倉はこのルートにおいて孤立の傾向を示しており、距離の割には言語的な異なりが大きいという結果になった。

宮崎県の対象地点の中で、言語的に開放的だという結果を示したのは宮崎市だけであり、その他の延岡市、日向市は共にこのルートにおいて孤立している。特に日向市にその傾向が強い。日向市は海を通じての交流が古くから盛んで、ルート以外からの影響を受けているとも考えられる。

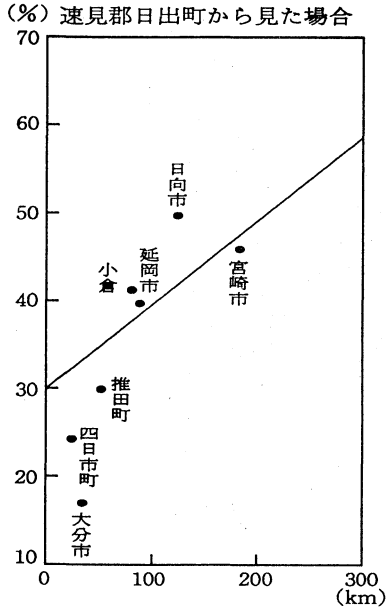
図B


(%) 築上郡推田町から見た場合
70
60
50
40
30
20
10
0
100
200
300
(km)
日向市
延岡市
宮崎市
小倉
大分市
四日市町
日出町

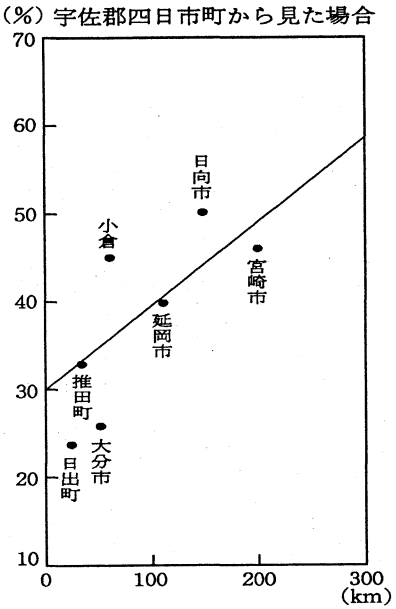
図A


(%)
小倉から見た場合
70
60
50
40
30
20
10
0
100
200
300
(km)
四日市町
大分市
延岡市
宮崎市
日出町
日向市
推田町

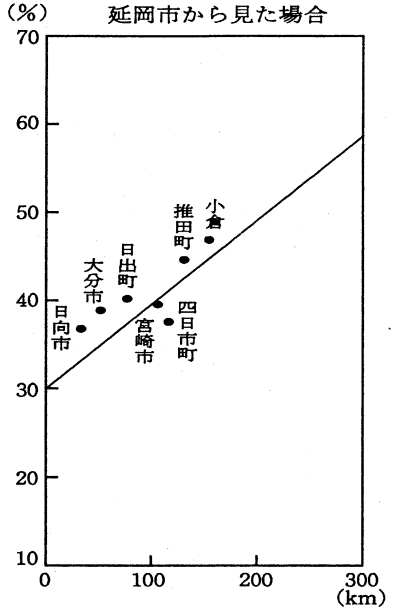
図D


(%) 速見郡日出町から見た場合
70
60
50
40
30
20
10
0
100
200
300
(km)
日向市
延岡市
小倉
宮崎市
推田町
四日市町
大分市

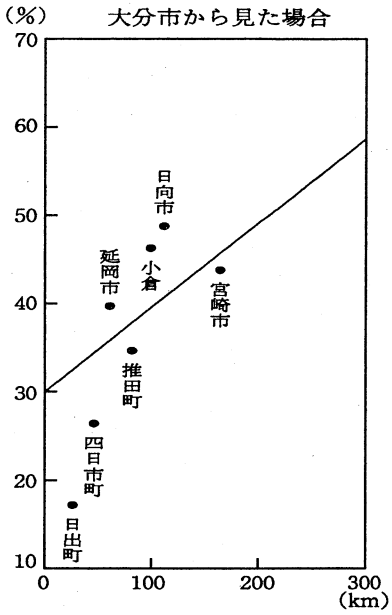
図C


(%) 宇佐郡四日市町から見た場合
70
60
50
40
30
20
10
0
100
200
300
(km)
日向市
小倉
宮崎市
延岡市
推田町
大分市
日出町

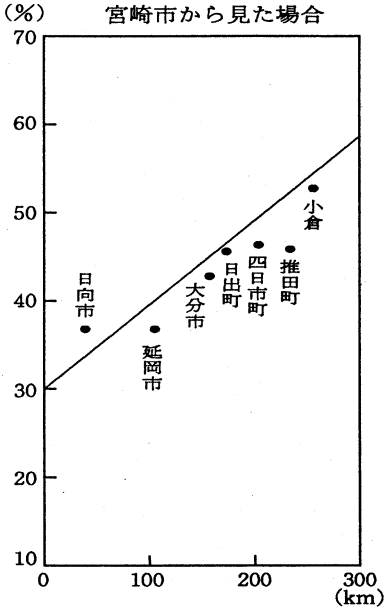
図F


(%)
延岡市から見た場合
70
60
50
40
30
20
10
0
100
200
300
(km)
日向市
大分市
日出町
宮崎市
四日市町
推田町
小倉

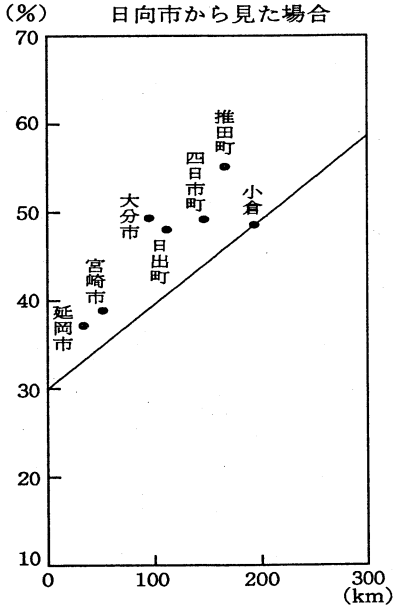
図E


(%)
大分市から見た場合
70
60
50
40
30
20
10
0
100
200
300
(km)
日向市
延岡市
小倉
宮崎市
推田町
四日市町
日出町

図H

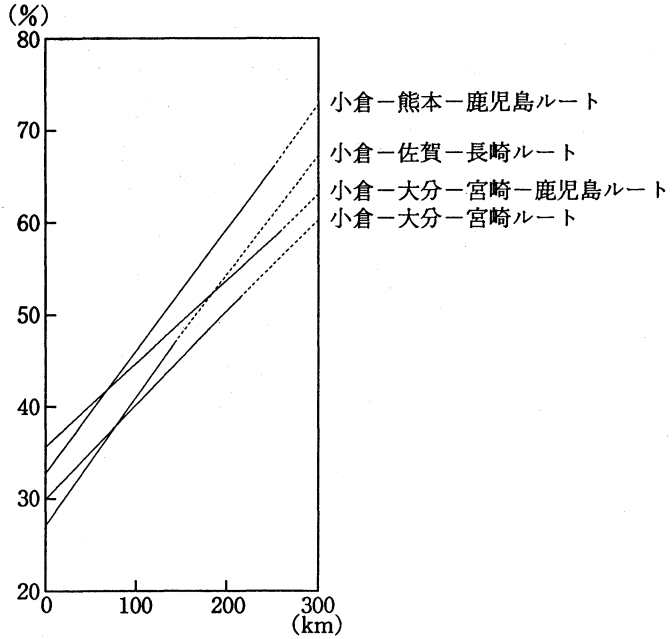

(%)
宮崎市から見た場合
70
60
50
40
30
20
10
0
100
200
300
(km)
日向市
延岡市
大分市
日出町
四日市町
推田町
小倉

図G


(%)
日向市から見た場合
70
60
50
40
30
20
10
0
100
200
300
(km)
延岡市
宮崎市
大分市
日出町
四日市町
推田町
小倉

（四）小倉―大分―宮崎―鹿児島ルート（省略）

（五）総合的に見た比較結果



ここに示した図は、序論で得られた①～④までの各ルートにおける式を同じグラフに書き込んだものである。以下、この図に基づいて考察を進めたいと思う。

繰り返しになるが、もう一度各ルートの式をあげておく。

①小倉―熊本―鹿児島ルート

Y＝三一・〇六四二〇＋〇・一三四九九X

②小倉―佐賀―長崎ルート

Y＝二七・一三三一〇＋〇・一三六七六X

③小倉―大分―宮崎ルート

Y＝二九・六三二二〇＋〇・〇九八七五X

④小倉―大分―宮崎―鹿児島ルート

Y＝三二・八〇〇三〇＋〇・一〇五一七X

この四つの式を比較すると、①ルートと②ルートの式の傾きはほとんど変わらず、③ルートの式の傾きが一番小さい値を示しているのが分かる。他のルートに比べて言葉の変化が小さい、また、ルート全体を通して比較的似たような言語をもっている、と言うことができるだろう。③ルートの対象地点に鹿児島県の対象地点を加えた④ルートの式の傾きは、③ルートよりわずかに大きい値を示している。

次に、各ルートにおける式の始点（X＝〇のときの値）に目をむけてみたい。この図においては、始点の値が大きいほど、歴史的における疎外要因が大きいことを示してい

る。

一番大きい値を示しているのは④ルートの式、次に大きいのは①ルートの式である。この二ルートにはどちらにも鹿児島県の対象地点が含まれており、鹿児島県の言語が非常に孤立していることがわかる。また、③ルートの式と④ルートの式とを比べてみても、式の傾きにはあまり差がないのであるが、始点の値をみると鹿児島県の対象地点を含む④ルートの方が大きい。ここでも鹿児島県の言語的性格とういものを見ることができよう。

②ルートの式は、始点の値においては四ルートの中で最も低い値を示しているが、傾きを見ると最も大きい値を示している。このルートにおいては長崎が非常に大きな言語的影響力を持っていた。鎖国時代において、長崎は日本唯一の窓として栄えており、九州の中心的存在だったと考えられる。故に言語的にも影響力を持つようになったのではないだろうか。言語的影響力を持つ都市が小倉から一番遠くに位置していたことが変化の度合を高める原因になったと思われる。

結び

本稿では、小倉を始点とする四つのルートを設定して方言を比較したのであるが、その中でも小倉―大分―宮崎ルートは他のルートよりも全体を通しての変化の度合いが低く、言語的にかなり均質であると言えるだろう。小倉―熊本―鹿児島ルートにおいては、小倉が言語的影響力を持っていると思われ、熊本県の対象地点と積極的な関係が認められた。一方で、小倉―佐賀―長崎ルートにおいては、小倉よりもむしろ長崎の方が言語的影響力を持っていると思われる。鹿児島県の対象地点は、小倉―熊本―鹿児島ルート、小倉―大分―宮崎―鹿児島ルートのどちらにおいても閉鎖的であり、非常に孤立的な言語状況にあることを確認できたと思う。

九州各地の方言を比較するにあたって、四本のルートの比較だけでは不十分なところもあったと思うが、大まかな流れを見ることはできたのではないか。今後の研究の参考になればと思う。

《参考文献》

＊『九州方言の基礎的研究・改訂版』
九州方言学会（風間書房　平三・一一・三〇）
＊「四国方言の分類と位置―日本言語地図を利用して―」
稲川順一（『国文研究』第三八号）
＊『講座方言学九―九州地方の放言―』
飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一　編集
（図書刊行会　昭五八・三・二〇）

＊『講談社版　日本の文化地理一六　福岡・大分・佐賀・長崎』
（講談社　昭四四・二・二四）
＊『講談社版　日本の文化地理一七　熊本・宮崎・鹿児島・沖縄』
（講談社　昭四五・一二・二四）
＊『角川日本地名大辞典』　竹内理三編集　角川書店
四〇福岡県　昭六三・三・八
四一佐賀県　昭五七・三・八
四二長崎県　昭六二・七・八
四三熊本県　昭六二・一二・八
四四大分県　昭五五・一一・一八
四五宮崎県　昭六一・一〇・八
四六鹿児島県　昭五八・三・八